慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 小幡篤次郎考 II : 慶應義塾教職員として |
| Sub Title | |
| Author | 西澤, 直子(Nishizawa, Naoko) |
| Publisher | 慶應義塾福澤研究センター |
| Publication year | 2001 |
| Jtitle | 近代日本研究 Vol.18, (2001. ) ,p.235- 257 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20010000-0235 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十八巻（二〇〇一年）

# 小幡篤次郎考 II

## ――慶應義塾教職員として――

西澤直子

### はじめに

本稿では、小幡篤次郎が益田英次にあてた書簡五通と、武田勇次郎にあてた書簡三通を紹介する。

益田英次は長門国阿武郡須佐村（現須佐町）の出身で、旧姓を石津といい、明治五（一八七二）年十一月、十七歳で慶應義塾に入学した。十年七月に本科を卒業し、その後益田と改姓した。『交詢社社員姓名録』によれば、十三年は慶應義塾英学生、十四年から慶應義塾教員となる。十九年三月、塾監に就任。三十二年七月までの長きにわたり、学生の指導にあたった。福沢は「小泉〔信吉〕君の温良剛毅」「浜野〔定四郎〕君の精確深識」「門野〔幾之進〕君の文才穎敏」（引用文中の〔　〕内は筆者による。以下同）と共に、「益田君の友愛活潑」をもっ

て指導すれば、学生が数千人いようとも「人の子弟を誤ることなき」と評価している。[1]「友愛活潑」の一方で、二十一年に試験制度の改訂をめぐり、学生たちによる同盟休校事件が起こったときには、休んでいる学生に対し一歩もひかない強硬な態度で臨んだ。二十三年と、二十八年から三十三年四月まで、会計主任も務めた。退職後は商業に従事し、丸三商会の支配人となったが、商用で香港滞在中肺患に罹り、帰国静養の甲斐もなく、四十一年八月に歿した。

武田勇次郎（勇二郎）は、元治元（一八六四）年二月生れ。備前国岡山小野田町の出身で、明治十九年十二月に入学した。その際『慶應義塾入社帳』に記された保証人は、益田英次である。二十二年十二月に別科を卒業、翌年すぐに慶應義塾に就職した。二十三年の学事報告では「教場取締、書籍係」となっている。ちょうど、慶應義塾には大学部が発足し、武田はその事務と図書室の仕事を担うことになった。『慶應義塾五十年史』は、「大学部唯一の幹事が、大学部全体の事務を執るの傍ら、或は〔図書室の〕館長とも為り、或は使丁とも為ると云ふ仕組」であったと述べている。[2]坂本易徳（紅蓮洞）の思い出話によれば、「館長も司書も閲覧室の監督も書籍の出入をするボーイの役までも武田君一人」で、武田はスパスパ煙草をふかしながら閲覧人を監督していたという。その後三十年二月に辞任し、三井呉服店に勤務、昭和十年十一月に歿した。[3]

益田も武田も、明治中期に慶應義塾の実務を担い支えた人物である。小幡の両名宛八通の書簡は、発信年がはっきりしないが、いずれも義塾実務に関わる書簡である。前号掲載の拙稿で述べたように、小幡は福沢の「よき女房役」とされるが、具体的な彼の行動についてはまとめられたものがない。本稿では、まず慶應義塾運営面での小幡の関わりを明らかにした上で、書簡を紹介したい。

## 一、教師としての小幡

初期の慶應義塾において、その教育法は他の多くの私塾同様、「半学半教」であった。すなわち上級の者は学びながら、かつ下級生を教えるのである。明治元年十一月に入塾した永田健助は、「〔福沢〕先生の講義は一週間二回づゝで、小幡君始め優等生は皆出席し、余も聴講を許された（中略）其以下は相互教授方で、小幡塾長は日日講義輪講を受持ち、なか〳〵勉強せられた」と回想している。[4] 小幡が最初に塾長になったのは、慶応二（一八六六）年から明治元年の間であるが、この時期の塾長は学生の長という意味合いであった。慶応元年六月入塾の立田革の談話によれば、入塾時には、塾舎の他に和田慎太郎（克太郎か慎次郎の誤り）の部屋と小幡篤次郎の部屋があり、また松山棟庵が、慶応三年に福沢がアメリカから持ちかえった本を翻訳していて「文章の分からぬ所は小幡さんに聞きました」と述べていることからも、小幡が「半学半教」の中心的役割を果たしていたことがわかる。[5]

小幡の具体的な講義内容は、『芝新銭座慶應義塾之記』付録日課表には、次のように書かれている。

［慶応四年四月版］

①クアツケンボス氏　合衆国歴史講義　月曜日・水曜日・金曜日　朝十時より。

②コルネル氏　ハイスクール　地理書素読　日曜日の外毎日　朝九時より十時まで。

［明治二年八月版］

①ウエーランド氏　経済書会読　月曜日・木曜日　一時より。[6]

②クワツケンボス氏　合衆国歴史講義　日曜日の外　毎朝八時より九時まで。

③歴史・究理書素読および講義　日曜日の外　毎朝九時より十一時まで。[7]

他の時期については、残念ながら詳しくはわからない。明治三年五月七日付藤野善蔵宛福沢諭吉書簡には「此度会議の上、素読会読の順を改め」て、会読を三日おき、日曜日が挟まれば四日おきと定め「壱ヶ月六度半」、不足であれば「壱人にて二会兼帯」し「一月十三度」とする。「就ては大幡も私も会読壱づゝ引請」れば、会読四十組が立ち、生徒五百人を引き請けることができるとあり、明治三年頃も大幡＝小幡篤次郎（弟甚三郎と区別するため、大幡と呼ばれた）が会読を受け持ったらしいことがわかる。[8]また明治二年九月入塾の須田辰次郎の「義塾懐旧談」では、「明治七八年頃福沢先生は、英語を解する者に非れば、英書の講義をなすこと出来ぬと云ふ理由なしとて、英語を解せざる人に向つて、英書の講義を試むべしとて、出版者の一部にて講義すること、となり、小幡先生は、仏人トークビル氏著英訳デモクラシーヲブアメリカを講義せられ」とあって、明治七、八年にはトックビルの*Democrocy in America*を講義していた。ただ、「最上級はウェーランドの修身論ギゾウの文明史等にて福沢小幡両先生の講義せられたることもあり」とも言い、[9]また明治四年十二月入塾の飯田三治は「〔福沢〕先生の講義は、誰れにでもよく解る。小幡さんの講義は、力のないものには分りにくかった」と回想しており、小幡の講義は上級生向けであったようである。[10]

小幡がいつまで講義を行ったかについて、明治七年五月入塾の尾崎行雄は「福沢先生小幡先生は私の時代には教へに来なかつた」と述べている。[11]同年四月入塾の鎌田栄吉は「特に先輩からチケット・システムで随意に講義を受けたりして、たとえば（中略）スリー・エッセイズ・オブ・レリジョン〔ミル『宗教三論』〕を小幡篤次郎に聞いたりした」と回想しており、[12]トックビル講義後は上級生の個人指導が中心となったと考えられる。『慶應義塾五十年史』掲載の教員リストをみると、「新銭座時代の教員」および「三田の初期に於ける教員」には名

前があるものの、「明治十五六年より同二十年頃迄の教職員」には含まれておらず、個人指導が中心であったことが裏付けられる。[13] しかし「道聴途説」の明治十二年三月二十日条には、福沢の自筆で「一、小幡篤次郎君が来月より塾の教授を一科受持つとの風聞」という書き込みがあり、その後も講義を担当した可能性は残る。[14]

また、大学部の教師としては、理財科の「作文」担当として小幡の名前がある。[15] 後掲資料【7】九月二十五日か付武田勇次郎宛書簡で告げている休講は、武田の在職期から考えて、この大学部の授業と推測される。一般塾生への定期的な講義は、おそらく明治十年代半ばまでには終了し、あとは個人指導を担当していたが、大学部発足にあたって上級生指導の一環として、作文の講義を受け持ったと思われる。

## 二、実務職員としての小幡

初期の慶應義塾においては、学生と教員同様、職員と教員の区別も明確ではなかった。前出の立田革は、入学の際まず「小幡塾頭（篤次郎）に逢ひ」、入塾を志願した。小幡の答えは、満員なので欠員があり次第入れようとのことで、「依て私は志望を陳べ、入口の二畳敷で宜しければ許されたしと云ひければ、先生に伺ひ上にて取計ふべしと遂に許可を得て、塾頭の傍の一畳に起臥すること、となれり」と述べている。[16] 明治二年五月に入塾した馬場辰猪も初めに「此の私学校の教頭であつた小幡氏に逢」っており、[17] 同二年九月に入塾した須田辰次郎は、「入社人がある場合にも小幡先生自ら硯箱と入社帳とを出して其れに各自姓名を記さしめられたり」「寄宿生の方は小幡先生が第一番に其処の監督に御出でになりました」と回想している。[18] 小幡は塾長として、入学の手続きや寄宿生の監督も担当していた。

明治五年十一月、慶應義塾が東京府に提出した「私学明細表」には、「事務社中」と「教授社中」が書かれているが、小幡は「事務社中」にのみ名前があり、「教授社中」には含まれていない。しかし、翌六年四月、同じく東京府に提出した「私学慶應義塾開業願」では、「教師履歴」の項目に、福沢に次いで「東京府管下商　小幡篤次郎　三十一歳　元治元年甲子六月より明治四年辛未の年迄都合八ヶ年、福沢諭吉許へ従学罷在候」とある。[19] 荘田平五郎の日記によれば、学生と教員は明治四年三月の三田移転の頃から「塾中に主客を分つの説」が起り、「半学半教」から次第に区別がなされたようだが、[20]「私学明細表」と「私学慶應義塾開業願」を見る限り、「事務社中」と「教授社中」には兼務も多く、六年頃でもまだ、明確な区別はなされていなかったと考えられる。

## 三、図書館設立への尽力

『慶應義塾図書館史』によれば、福沢は明治十年東京大学の開校式の際に、図書館を見学した。また同時期、和歌山県新宮の水野家が、旧藩の蔵書を慶應義塾に寄附すると申し出た。そのどちらかが契機となって、慶應義塾内に図書館が建てられることになった。それは「文庫」あるいは「書籍庫」と呼ばれ、明治十二年二月に来日した英国下院議員サー・エドワード・リードが見学しているので、それまでには完成したことがわかる。[21] 図書館開設に際し、小幡は貸出規則と目録の作成に参加している。「道聴途説」明治十二年四月二十一日条には、福沢の自筆で「本塾文庫の取調八田小雲氏引受にて、此節既に整頓、不日貸渡の規則を設け、社中自由に借用するを得べし。其規則の調は小幡篤次郎、加藤政之助引受なり」とあり、[22] また鎌田栄吉は目録作成について、「その書物のカタログを作るのが又面白い。そのカタログの作り方が中々システマチックで仮名でいろは順か何かで引

けるようにする。それで阿部〔泰蔵〕さん、小幡さん、私共も参加してやりました」と語っている。[23]

## 四、慶應義塾維持問題

小幡は元治元（一八六四）年の入塾だが、その後慶應義塾の運営は常に順調だったわけではなく、最初の大きな転機は、学生数の減少によって、明治十三年に福沢が廃塾を決意したときであろう。十月二十四日付白洲退蔵宛福沢諭吉書簡には次のようにある。

「此程旧社中小幡篤次郎等え談し、此回ハ不得止次第ニて廃塾ト決し、現在之地面建物ハ売却、其代金四、五万円をバ旧社中ニ配分可致旨、私より発論候処、社中ハ容易ニ之を承知不致。去迚維持之法あらざる以上ハ、廃止之外策無之ト彼是話し之末、別紙之文案を記し、尚社中相談中ニ御座候」[24]

福沢から廃塾を告げられた小幡ら「十数名の人々」は数回小幡邸に会合して協議の末、あくまでも義塾を維持することに決し、「慶應義塾維持法案」を定めて、資金を公に募集し、維持の費用に充てることになった。[25]

公募した資金によって運営することになったので、その資金を管理し、学事全般を統轄する組織が必要になった。そこで十四年一月二十三日、「慶應義塾仮憲法」が制定された。仮憲法では「本塾の学事会計一切の事務処弁を嘱托」する二十一名の「理事委員」が、「慶應義塾維持の為に醵金」した「維持社中」の互選によって選出されることになった。小幡は最初の二十一名に選ばれ、十六年および十七年にも改選されている。[26]

## 五、慶應義塾大学部の誕生

経営危機をのり越え、明治二十年代に入って福沢は、慶應義塾に高等教育機関として大学部を設置することを考え始めた。明治二十年三月二十八日付猪飼麻次郎宛福沢諭吉書簡には「本塾にも入社頻に多く、昨今既に八百余名に相成、却て困却致居候。本年九月後は数学と語学の専門科を設け、追々金さへあればユニヴハシチに致度語合ひ居候」とある。アメリカ留学中の長男一太郎にあてても四月に「何れニも慶應義塾ハ、大学校之姿ニ致す積りなり」と書き送っている。(27)

大学部の体制は、当時大蔵省に出仕していた小泉信吉を慶應義塾総長として迎え、小泉のもと、前塾長の浜野定四郎が会計建築長、門野幾之進が教場長（学事担当）、益田英次が引き続き塾監となり、資金募集や学事・組織の改良に着手することになった。また前述一太郎に対しても「いよ〳〵貴様が帰国、慶應義塾ニ従事、その義塾ハ今より頻りニ金之工風致して、大学校と為ることならん。その大学校教師又ヂレクトルなどなれバ、拙者共〔福沢夫婦〕ハ満悦之至りニて、二念無之候」（前掲書簡）と書き、大学部の一翼を担うことを期待している。しかし、小幡はその構想に入っていない。福沢の甥で、山陽鉄道会社社長や三井銀行理事などを務めた中上川彦次郎は、長年慶應義塾を支えてきた小幡を大学校設立という大改革からはずすことを心配して、福沢にその旨を伝えたようで、それに対し福沢は次のように答えている。

「小泉が総長ニ付、小幡之感触如何ハいらさる心配なり。小幡を棄るニあらず、小泉が入れバ福沢と小幡は顧問なり。むかし、三井抔大店向ニて、番頭之上ニ隠居なるものあり。即ち福沢、小幡ハ其隠居之地位ニ

居る者なり」

同年十月十三日付日原昌造宛書簡でも「〔小泉〕氏か塾ニ入ると同時ニ、少し模様を変へ度と申ハ、塾之地主之名義を福沢より塾之コルポレーションえ移す事、小幡を社頭にして福沢之名を止る事、教育会議之員を集る事等是なり」と述べ、小幡を現役から一歩退いた位置におくことを考えている。[28] おそらく福沢にとって小幡は、共に慶應義塾を作りあげてきた同志であり、次世代への橋渡しを考えて顧問的立場にあるべきだと考えたのであろう。

だが、福沢の思惑通りには事が運ばなかった。二十一年二月に正科生たちが、採点方法の改定をめぐって不満を訴え、自然に授業を休むようになり、それに対して退校処分という強硬手段をとった学校側に反発して、十六日から同盟休校に入った。[29] 三月五日に一応の決着をみて、翌六日から平常に戻ったが、この問題は思ったよりこじれ、八月十八日になって、福沢が教場長である門野幾之進に対して、次のような書簡を出している。

「扨妄に面白からざる一事を生じたりと申は、本塾教員の中に物論有之、様々相談も致候得共其甲斐なく、今日の処にては仁兄御事暫時塾務を御休息被下候より外に手段無之、尤この義に付ては小泉氏へも再三の相談、氏は断じて不承知と申持論なれ共、さればとて塾の居合方を主にして見るときは其持論をも枉げざるを得ず」

教員間に不和が生じ、「小幡氏抔へも屢〻相談を煩はし」た結果、小泉の同意はないが、騒ぎの大元を作った門野に対して、一学期か二学期の間「半御養生の積り」で休むようにと告げたのである。[30]

二十二年一月になると、いよいよ大学部のための資金募集を行うことになり、「慶應義塾資本金募集の趣旨」が発表された。この趣意書は、肩書きなしの福沢諭吉・小幡篤次郎・小泉信吉三者の連名であった。こじれた教

師間の関係などを考慮すると、社頭福沢、塾長小泉での募集というわけにはいかなかったのであろう。また門野への処遇や大学部で雇う外国人教師の報酬をめぐる福沢との確執から[31]、小泉は五月になると病気を理由に、和歌山に帰省してしまった。その際『時事新報』に掲載した広告には「小生義病気療養ノ為メ京坂地方ヨリ郷里和歌山へ漫遊致候ニ付、留守中慶應義塾ニ係ル用向ハ、総テ同塾々監局へ御文通可被下候　慶應義塾々長　小泉信吉」（五月三十一日付、句点は筆者）とある。

小泉不在中にその代行を務めることができたのは、やはり小幡であった。八月には慶應義塾の運営にあたる組織をより強固にするため、それまでの「慶應義塾仮憲法」に替わり「慶應義塾規約」が定められ、理事委員に代わる評議員が選出されることになった。第一回選挙は十月五日に開票されたが、その結果報告は小幡が行った。小幡自身も選出され、三十四年十一月に辞任するまで再選され続けた（評議員については後掲［1］益田英次宛書簡の注参照）。二十二年八月十二日付猪飼麻次郎宛福沢書簡には「塾も少々改革致度、昨今ハ小泉氏も病気ニて帰国、専ら小幡君の尽力ニて、様々計画致し居候」とあり、結局は小幡に負うところが大きかった[32]。

十月十日には第一回の評議員会が開かれた。会長席には小幡が就いて塾長の選挙が行われ、小泉信吉が当選した。しかし小泉は次のように述べ、病気を理由に小幡の補佐を求めた。

「〔小泉〕氏は衆員に向ひ、自分事諸君の撰挙に預りたるは辱きも、昨今病気にて其任に堪へず、全快に至るまで小幡君にて事務を監督さるゝとの承諾ありて、又各位に於ても之に同意ならば、其任を受く可し」[33]

小泉が評議員会に出席したのは、福沢が「小幡始肥田其外諸氏と相談、是非共大兄御帰京不相成候ては百事纏り申間敷」と書簡を寄せ、又福沢の意を受けた中上川彦次郎が訪問したことによろう[34]。小泉の申し出に異議がなかったので、小幡が塾務の監督にあたった。十一月には、大学部のための資金募集委員が決められ、小幡も東京

横浜地区三十七名のうちの一人となっている。

二十三年一月には大学部がいよいよ開校となった。それに先立ち、二十二年十一月に生徒募集が行われたが、『時事新報』掲載の広告によれば、十二月二十五日以前に出願、一月中旬入試で、試験科目は地理・地文・日本歴史・外国歴史・物理学化学・数学・英文和訳・和文英訳・英語会話・漢書訓読・日本作文及手跡であった。二十三年一月十五日付高田源次郎宛福沢書簡に「本塾の大学試験は過日来着手、本月十八日にて終る筈にて、小幡氏の任ずる所に御座候」とあり、この入学試験も小幡が担当していた[35]。塾長としての実務は、五月以来小幡に依ったことになる。

## 六、塾長・副社頭・社頭としての小幡

二十三年三月十四日に開催された第一期第六回評議員会で、小泉信吉は塾長を辞任した。代わりに小幡が塾長に推薦され、名実ともに塾長となって、慶應義塾を率いることになった。しかし大学部は思うように入学者が集まらず、また中退者も多く、経営は不振であった。ひとつには普通部を卒業すれば、社会的に慶應義塾の卒業生と認められたので、大学部へ進む必要がなかったことからともいわれている。経営不振については、『慶應義塾百年史』中巻前に詳しい[36]。

二十九年六月十五日に行われた第四期第七回評議員会では、「大学部存廃の相談会」を開くことが話し合われた。十月十五日の第十回評議員会では、大学資金の再度募集によって維持をはかる計画がたてられるが、評議員中上川彦次郎は、大学部を廃止して高等科を充実すべきであるという意見を述べた。小幡も同意見で、結局、大

学部は「現在生徒卒業の後」廃止し、代わりに高等科に更に一年位の学科を増設すること、本年は募集を行わないことを評議員会の意見として決した。しかし、小幡が福沢に伝えたところ、福沢の意見はあくまでも存続維持であった。十一月十六日の第十二回評議員会で、福沢の意見として存続維持が報知されると、決議は一転して存続となった。

三十年八月六日付で福沢が日原昌造に送った書簡によると、「慶應義塾も金が次第になくなり候（中略）金がなければ止めにしても不苦候得共、世の中を見れば随分患ふべきもの少なからず、近くは国人が漫に外戦に熱して始末に困ることあるべし、遠くはコンムニズムとレパブリックの漫論を生ずることなり、是は恐るべきことにして、唯今より何とか人心の方向を転ずるの工風なかるべからず」とあって、過剰な戦争熱やコミュニズムかレパブリックかの議論など日本が抱える課題を目のあたりにして、存続は最高学府として社会に果たすべき役割を考えての意図であったことがわかる。(37)

しかし、小幡は中上川同様、今回幸にして「多少の資金を募集し得る」としても、これを消費し尽してしまえば「又々今日と同一の困難に陥」るのであって、むしろ高等科や普通科を充実すべきであると思っていたようだ。(38)

小幡は八月十三日付で、塾長を辞任した。評議員による塾員への告知によると、塾長欠員中は「社頭福沢先生」に塾務を執ることを請い、福沢が承諾したとある。大改革であった大学部設立によって、塾務の中心が小泉から小幡、小幡から福沢へと戻ったことになる。小幡は塾長辞任後、翌年四月の第五期第四回評議員会で、副社頭を嘱托された。前述の「慶應義塾規約」が改定されて、「社頭事故ありて事を視ること能はざるときは副社頭之を代理す」と定められ、新たに設けられた役職である。『慶應義塾百年史』はこの措置を、ひとつには長年慶

應義塾を支えてきた小幡への配慮であり、もうひとつの理由は福沢の高齢化であろうと推測している。(39)

三十四年二月三日福沢死去後、小幡は社頭の実務を執り、十月社頭に昇格した。

## 七、資料紹介　小幡篤次郎書簡

以下、前述の増田英次および武田勇次郎宛書簡八通を紹介する。

**［1］益田英次宛　年未詳二月十五日付**

拝見御明示之件。御尤ニ奉存候得共、既ニ今日ニ迫り、リスカム氏ドロッパー氏へ面会之事申入候ても、帰宅后なれハ、午后来校を申遣し、夫より相談ニかゝり、夕刻之会へ申出候都合、些と間ニ合兼候義ニ有之間、今日評議員ニ申出候事ハ止メ置申度候。

過日来御不快之事、鳥渡御尋申度候処、日々早出晩帰之次第、御無音申上候。折角御加養奉祈候。此段御返事申上候。拝具。

二月十五日　　篤次郎

益田様

【注】本書簡は、評議委員会に提出する案件について相談している。文中の「リスカム」「ドロッパー」「評議員」については以下の通り。

①リスカム　William S. Liscomb

アメリカブラウン大学卒業。明治二十二年十月来日。翌二十三年一月慶應義塾大学部文学科主任教師就任。義塾との雇用契約ははじめ三年で、満了となった二十五年末には更に二年の再契約を結んだが、健康を害し、二十六年六月辞職。七月に帰国し、九月歿。主に英文学を担当。「懇切な授業ぶりは、温厚にして篤実な人柄と相まち、よく学生たちの敬意の的」になっていた。『慶應義塾百年史』は「Lee's Graphic Chart of English Literature と題する図や、同じくエマーソン、ホームズらアメリカの名随筆家の肖像などはかれのもたらした教材の一つ」と推定している。(40)

②ドロッパーズ　Garrett Droppers

一八六〇年アメリカ・ウィスコンシン州ミルウォーキー生れ。ハーバード大学卒業。その後ベルリン大学で学ぶ。明治二十二年来日。翌年一月大学部理財科主任教師就任。理財科・法律科で経済学原理、文学科で社会学などを教える。三十一年十二月まで在職。帰国後南ダゴタ州立大学総長、ウィリアムス大学教授などを務め、大正三（一九一四）年から六年間は在ギリシャおよびモンテネグロ特命全権公使。西川俊作「G・ドロッパーズの履歴と業績」『三田商学研究』26（1）。

③評議員

「慶應義塾規約」中の評議員に関する規定は、次のようなものである。

①選挙および被選挙権は、慶應義塾々員が有する。

②記名投票で、塾員中三十名が選ばれる。

　欠員がでた場合は、次点者より得票数順に補充する。

③在職年限は四年で、重任できる。

④社頭、副社頭、塾長、教員、職員はすべて評議員にはなれない。
⑤評議員会の会長は、評議員中より互選する。
⑥評議員は月一回の定期会、また会長の招集による臨時会に参会し、塾務を議決する。
⑦評議員会は、十名以上の出席がなければ成立しない。
⑧評議員は、記名投票で塾長一名を選挙する。
⑨評議員は、互選によって財務委員一名を選挙し、選ばれた者は会計を監督する。
そして塾長の義務として、「評議員会の決議に基き」一切の塾務を総理し、教職員の人事と財産の監守を行い、学年末には翌年度分の予算案を作成して、評議員会の決議を経ることが定められている。(41)

**［2］益田英次宛　年未詳八月十五日付**

日々炎熱、如何御凌被成候哉奉伺候。
陳は、外山正一氏より曾て慶應義塾え傭申候フェントン氏ハ、生徒之気受等如何との聞合有之候。御存知之処、御洩被下候様奉願候。拝具。
八月十五日　篤次郎
益田様

**【注】**本書簡では、フェントンに対する生徒の評判を尋ねている。「フェントン」「外山正一」については以下の通り。

①フェントン　George Fenton

イギリス人。明治二十年前後に在職し、慶應義塾普通部で英語を担当した。二十四年四月退任。

②外山正一

嘉永元（一八四八）年九月、幕臣外山忠兵衛の長男として生れる。開成所を経て、イギリス・アメリカへ留学し、ミシガン大学で哲学などを学ぶ。帰国後、東京大学教授、東京大学総長、貴族院議員、文部大臣を歴任。号は丶山（ちゅざん）。明治三十三年三月歿。

**［3］益田英次宛　明治二十二年か十二月十四日付**

拝啓。試験原稿一葉差上候間、御落手可被下候。

昨夕ハ猪肉沢山御恵与奉多謝候。山中君へ宜御伝謝奉頼候。早速賞味可致と相楽罷在候。尚、相伺度ハ猪肉而已ニ有之候哉、鹿肉も一部ニ有之候哉、調製上相違候。右一寸御口答奉願候。

十二月十四日　篤次郎

益田様

**【注】**　本書簡は、試験原稿の提出を報告し、また猪肉を贈られたことに感謝している。試験については、明治二十三年一月十五日付高田源次郎宛福沢諭吉書簡に、「本塾の大学試験は過日来着手、本月十八日にて終る苦にて、小幡氏の任ずる所に御座候」とあることから、(42)本書簡はそのころのものか。「山中君」は未詳。

**［4］益田英次宛　　明治二十九年か五月三十日付**

昨晩十時頃着信之処、小生帰宅十一時過なりし為め、受取候もの申忘れ、今日申出候て、延引之□〔到カ〕ハ御詫申候。朝鮮へハ返電ヲ発し置申候。明日御出掛被下候ハヽ、用意之御相談可致候。此段申上候。拝具。

五月三十日　　篤次郎

英次様

**【注】**　本書簡では、朝鮮への返信の遅れを詫びている。『福沢諭吉全集』第十八巻に、明治二十九年のものかと推定されている七月一日付益田英次宛福沢諭吉書簡が収録されており、翌二日に朝鮮人十八名（李竣鎔、尹致□、魚允廸など）と益田、小幡、福沢一太郎、福沢捨次郎らが会食する予定と、仕出し屋と思われる三縁亭への注文が書かれている。この小幡の書簡も同時期か。福沢書簡の発信年は、福沢家の金銭出納帳にある朝鮮人客費としての三縁亭への支払記録から推定されている。しかし、前年の二十八年には、朝鮮政府との間でそれまでに掛かった留学生の費用を精算し、同年八月には新に朝鮮学務衙門と留学生に関する契約を結んでおり、また同全集で明治三十年のものかと推定されている三月二十日付小幡篤次郎宛福沢書簡は、学務衙門との契約を巡って生じた問題に関するものなので、この益田宛小幡書簡が、二十八年や三十年である可能性も否定できない。

**［5］益田英次宛　　年未詳十月二十七日付**

御同県人西田実太郎と申す人、雑賀敬三郎氏之添書持参。則ち別紙なり。同人之就学之場所、何処か宜から

んと相談。些年齢も進まれ候事故、専門専修□（迄カ）之学校ニて、専門之業ニ就候方可然哉ニも相考申候。猶、貴君へ篤と御相談可然と申勧置候ニ付、何卒御面話、同人身事御聞取、御指図有之度奉存候。尚、今夕拝芝之時、委曲可申尽候。拝具。

十月廿七日　　篤次郎

益田様

**【注】**　本書簡は、西田実太郎なる人物の就学について、同人の相談にのってくれるよう依頼している。西田の慶應義塾への入学記録はない。

## [6] 武田勇次郎宛　明治二十七年か十月十九日付

本月十六日之貴翰、昨夕相達拝見。御渾家益御安泰奉大賀候。又宿元老少無事之趣、御報知奉多謝候。御監督下之学生、何れも勉強之よし安堵仕候。御序ニ宜敷御伝声奉煩候。

来ル廿九日頃帰京可仕、何そ御土産之賞品持参可致候。勇太郎殿ハ用事相済、不日帰途ニ就候趣、何れ当地或ハ神坂ニて、対面可致事ニ被相考候。

発途之節ハ御見送を忝ふし多謝之至ニ奉存候。当地之事情ハ世悴迄略報致置候ニ付、御一覧被下度候。

此段御答申上度。匆々拝復。

十月十九日　　小幡篤次郎

武田勇次郎様

〔封筒表〕東京芝区三田弐丁目弐番地　武田勇次郎様　拝復
〔封筒裏〕封　広島市停車場前溝口より　小幡篤次郎

【注】本書簡は旅先から、塾生の勉強ぶりに安心し、帰京予定などを報告している。

**【7】武田勇次郎宛　年未詳九月二十五日か付**

小生義、両三日前より、又々脚気之為メ引籠り候ニ付、今朝は出席不得致候。此義一昨日塾監局迄申遣置候処、不行届之事ニ有之候。宜生徒中え御断奉頼候。

九月廿□〔五カ〕日　篤次郎

武田様

〔封筒表〕武田勇次郎様　小幡篤次郎

【注】本書簡では、休講の連絡を依頼している。

**【8】武田勇次郎宛　明治二十五、六年二月四日付**

今晩ホームス来校之筈、小生も出校之考ニ罷在候処、少々差掛り用事出来、不得其意候ニ付、何卒同氏へ宜敷御伝、尚学生引合之事奉願候。

二月四日　　篤次郎

武田様

〔封筒表〕武田勇次郎様　用事〔封筒裏〕〆　小幡篤次郎

【注】本書簡は、ホームスを学生に引き合わせるよう依頼する。「ホームス」については以下の通り。

ホームス　E.Homes

イギリス人。明治二十五年から二十六年ころに慶應義塾大学部理財科で英作文を担当した。明治二十年前後に義塾に在職した Gervais Homes なる人物もあり、『慶應義塾百年史』によれば同一人物か否かは不明。武田の就職時期から考えると、このホームスは E.Homes であろう。

## おわりに

小幡篤次郎は、明治中期までの慶應義塾において、教育面でも組織運営面でも中核をなす人物であり、まさに福沢の片腕であった。しかし明治二十年、慶應義塾が大学部創設という大改革を為すにあたって、次世代への継承を考えた福沢は、あえて小幡を長には据えなかった。福沢にとって、小幡はともに慶應義塾を築きあげてきた同志であり、福沢とともに現場からは一歩退いた立場で助言すべきと考えたのであろう。だが、福沢の思惑通りにはいかず、結局「此節塾の方は小幡氏の引受」となってようやく、「先づ是れにて安心」と安堵できたので

ある。[43] その後二十年代末の大学部存続をめぐっては、福沢と意見を異にするが、副社頭として福沢の傍らにあって義塾を支える役割は変らず、福沢歿後、次世代への橋渡しを担ったのも、小幡であった。

**注**

（1）『慶應義塾百年史』中巻前　八四一頁。
（2）『慶應義塾五十年史』五〇五頁。
（3）『慶應義塾図書館史』四一頁。
（4）『慶應義塾百年史』上巻　二八五頁。
（5）立田の談話は同右　二〇九頁。松山の談話は「懐旧談」『慶應義塾学報』一一五号　一二頁。
（6）ウェーランドの経済書は慶応四年四月の日課表では、福沢諭吉が担当している。明治二年八月は、福沢は同じウェーランドの「脩心論」を講義している。その修身論は、小幡が購入してきた古本の原書で知ったと、福沢自身が書いている。『福沢諭吉全集』第一巻　四八頁。
（7）この素読および講義は、塾生の急増に対応すべく設けられた汐留出張所で行われた。『慶應義塾百年史』（上二八三頁）によれば、汐留には初学のものが集められ、毎日新銭座からの出張授業が行われた。この素読と講義は、福沢諭吉、小幡、永島貞次郎、小泉信吉、肥田鉉次郎、藤野善蔵で担当した。
（8）『福沢諭吉書簡集』（岩波書店、二〇〇一年～）第一巻　一七〇頁。
（9）『三田評論』二三五号　五二頁、二三二号　六四頁。
（10）「義塾懐旧談」『三田評論』二四三号　五九頁。
（11）『慶應義塾百年史』上巻　五八八頁。
（12）同右　五六三頁。
白水生なる人物（未詳）は「（明治初期に）小幡篤次郎、小泉信吉の諸氏は、ミルの経済書を研究したと云ふことである」と語っている。「義塾懐旧談」『三田評論』二五五号　五四頁。

(13)『慶應義塾五十年史』四五八頁。
(14)『福沢諭吉全集』第十九巻　三九七頁。
(15)『慶應義塾五十年史』四六七頁。
(16)「義塾懐旧談」『三田評論』二五〇号　五五頁。
(17)『慶應義塾百年史』上巻　二二七頁。
(18)「義塾懐旧談」『三田評論』二三三号　四一頁、「余の在塾中に於ける珍談奇聞」『三田評論』二三三号　六頁。
(19)『慶應義塾百年史』上巻　三六六頁、四一三頁。
(20)同右　三三〇頁。
(21)『慶應義塾図書館史』三五頁。
(22)『慶應義塾百年史』上巻　六八九頁。
(23)『慶應義塾図書館史』三六頁。
(24)『福沢諭吉書簡集』第三巻　四五頁。
(25)『慶應義塾百年史』上巻　七五七頁。
(26)同右　七六九頁。
(27)猪飼宛は『福沢諭吉書簡集』第五巻　一七七頁。一太郎宛は四月十三日付、同右　一八〇頁。
(28)同右　二八三頁、二九〇頁。
(29)採点方法の改定は、平均ではなく一科でも六十点に満たない科目があれば及第させないとするもの。『慶應義塾百年史』中巻前　九〇九頁。
(30)『福沢諭吉書簡集』第六巻　四七頁。
(31)明治二十二年四月十二日付小泉信吉宛福沢諭吉書簡（同右　一一七頁）参照。
(32)『福沢諭吉書簡集』第六巻　一六四頁。
(33)『慶應義塾百年史』中巻前　八五三頁。
(34)九月三日付、『福沢諭吉書簡集』第六巻　一六七頁。

（35）同右　二三一頁。
（36）『慶應義塾百年史』中巻前　一〇〇九頁。
（37）『福沢諭吉全集』第十八巻　八〇一頁。
（38）『慶應義塾百年史』中巻前　一〇一七頁、一〇二〇頁。
（39）同右　一〇六九頁。
（40）同右　八六六頁。
（41）同右　八五〇頁。
（42）（35）に同じ。
（43）『福沢諭吉書簡集』第六巻　三二〇頁。

（にしざわ　なおこ　本塾福澤研究センター研究員）